

## 名は星をあらわす(?)

## What's in a name?

み お みのる  
三尾 稔

民博 グローバル現象研究部

インド西部の農村で初めて滞在調査をしたとき、とまどったことのひとつは子どもの名前が頻繁に変わることだった。学校に上がるころまでが特にそうで、デヴィ・ラールと聞かされていた男の子が、一週間くらいして別の人から「いやいや、この子はデヴィ・ナーラーヤンさ」などと言われることが結構あった。筆者がからかわれていたわけではなく、実際に子の名がころころ変わるのである。

インドには日本のような戸籍制度はなく、出生届けをいつまでに役所に出すという決まりはない。子の名は両親や家族、親戚、ときにはその知人たちが好みや呼びやすさで思い思いに決め、いくつかの呼び名のなかから何となく周囲の合意ができて、その子らしいものが決まってゆく。この世に生まれた無垢むこの存在は、周囲と関係をもちながら次第にかけがえない位置を得てゆく。子どもの名が時間をかけて固まってゆく過程は、人が人格を得てゆくプロセスのもののように思える。

とはいえ、命名が周囲の好みだけでおこなわれているのか、というところでもない。そこにはもうひとつ大事な要素として星占いが絡んでくる。

インドは占星術学部のある国立大学もあるし、多くの政治家が占星術師を雇って活動の指針を相談するなど、伝統的な星占いが大切にされている。庶民（特にヒンドゥー教徒）のあいだでも星占いは大事で、例えば結婚縁組の成否は最終的にカップルの星回りの相性で決まることが今も多い。いくら他の相性が

よくても星回りが合わないと破談になることもある。個人の運勢を司るのはわたしたちにもなじみ深い一二星座宮だ。しかし、欧米や日本の星座は当人の誕生時の太陽と星座宮の位置で決まるのに対し、インドの場合は誕生時の星座宮と月の位置で決まる。この位置関係は頻繁に変わるので誕生時刻が近い者どうしても星座が異なることはよくあり、暦を読み込まないと個人の星座はわからない。子どもが生まれると親はバラモン階層に属する星占い師にわが子の誕生時刻を告げる。星占い師は暦を見て、その子の星座宮を教え、誕生時の一二星座宮と月や太陽、惑星の位置関係を示した図を描いてくれる。この図はジャンム・パットリといい、将来の縁談や詳細な運勢占いに役立てられる。

このとき星占い師はその子に適した名前の頭の子音も教えてくれる。星座ごとに個人名の最初の子音がいくつか決まっているのである。名付けはこれを手がかりに、神々や神話にゆかりがあり、かつ人びとが好ましいと思う名からなされる。逆にいえば頭文字から当人の星座がわかり、簡単な運勢占いもできるわけである。こうして人の名は運勢を支配する星座に、いわば「タグ付け」されることになる。

インド西部のヒンドゥー教徒の命名の過程には星や神々の世界と、現世の世間が両方かかわり合っている。しがらみが多くて大変そうではあるのだが、親たちだけで個人的な名をひねり出すより、案外含蓄に富む名付けのできるしくみといえるかも知れない。